



肥後琵琶師
やましかきょうえん
山鹿教演さん
(芸名・玉川教演)

■プロフィール

- 1901年 熊本県南関町小原生まれ。幼少より視力が弱かった。
- 1923年 天草郡本村(現本渡市)の江崎初太郎師に弟子入り
- 1927年 南関で「名びらき」を行い、東北を中心に演奏活動に入る
- 1973年 天台宗玄清法流にて得度
- 1977年 県文化財功労者表彰
- 1979年 勲五等瑞宝章受章

鎌倉時代に生まれた叙事詩の傑作「平家物語」。その語り部として欠かせなかったのが、琵琶法師の存在です。琵琶は、その後も芸能あるいは宗教活動の一つとして庶民の生活の中に深く根差していきました。中でも熊本には、薩摩や筑前琵琶とは異なる肥後琵琶が独自に伝承されています。その数少ない語り手、山鹿教演さんは芸歴七十年。年々琵琶が忘れられていく中で山鹿さんは今何を思うのか、お話をうかがいました。



「お客さんが喜んでくるとが一番。ぼってん、自分ではなかなか満足できん。年取るとますます自分で気に入らんようになった。」

「わが飯食う道は知とらん」と琵琶の道に

肥後琵琶というとは、もともとはなかったつです。昔、私どもの師匠のそのまた師匠が細川のお殿さんに気に入られて、肥後の殿さんの琵琶でいわるるうちに、なまっつて肥後琵琶で呼ばれるようになった。

琵琶は始めたとは二十二年とき。目も見えんし、「うちにおつても仕様のなか。針灸を習え」と言われたばつてんいやで、ケンカして家を出たりもしました。浪曲をしたかと自分では思うたですが、琵琶の方がよからうてことになつて天草で師匠についたとです。な〜ん、食べるために始めたつです。な〜ばつてん、師匠の家じゃ百姓仕事ばかりでなかなか教えてもらえん。そる

で途中、親父が病気になつて、南関に帰つたつです。

「候」だの「ござる」だのわからんて。

どうして若か人はわからんぞがそら、稽古のきつして、「琵琶で食うていかんでもよか」て思たこともありません。追善供養とか還暦の祝いとかで呼ばれて「何にしましょうか」て言うとか、「こつちが言うとは何でもできるとか。しきらんくせに何にしよかて偉そうなことば言うな」とか、「文句(＝台詞)の違つとる。空言を言うな」て怒られたこともありました。

戦争前はよかときもあつたばつてん。そん後は時代も人ん心も変わつてしまつて。言葉の難しかて言いなはる。「候」だの「ござる」だのわからんて。

どうして若か人はわからんぞか。

弟子を取るも取らんも一年くらい来てからやめる。録音は聞いて練習するて言う人もあつたばつてん、録音は動かんもんねえ。二十年経つたつてダメて言うたです。聞くと人のおらんこつなつたとは仕様んなかこつです。ぼつてん、私は琵琶をやつとつたからこそ、こつまで生きてこれたと思つとります。

山鹿さんは現在には独り暮らし。昼間はボリウムをいっばいにしたラジオを聞いて過ごしている。隣家に弟家のミチエさんがいて様子を気遣うが、人の手を借りるのが嫌いで、不自由な目にもかかわらず食事も自ら作つてしまふ。七月に上京し、演奏ばしてきたという山鹿さん。何が今一番楽しいか尋ねると「一杯飲んどるとき」笑顔になつた。取材を終えていとまを告げると、膝をそろえて「ありがとございました」と深くと頭を下げ、大いにあわてさせられた。



耳は遠くなったものの、ハリと脆のある声は朗々と響き渡る。今でも近辺のワタマン(新築の家の祓をし、無病息災を祈る儀式)に呼ばれることも

肥後琵琶師・山鹿教演九十一歳の「とはずがたり」

時代も人の心も変わつて仕様んなかばつてん、

こつまで生きてこられたとは琵琶のおかげ

